



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中世ドイツ文学の発信型研究の試み：日本文化を出発点として
Author(s)	寺田, 龍男
Citation	メディア・コミュニケーション研究 = Media and Communication Studies, 61: 169-184
Issue Date	2011-11-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/47577">http://hdl.handle.net/2115/47577</a>
Right	
Type	bulletin (article)
Additional Information	



Instructions for use

# 中世ドイツ文学の発信型研究の試み

—— 日本文化を出発点として ——

寺 田 龍 男

## 1. はじめに

生田弘治 (1882-1936) は1906年に著わした「国民的叙事詩としての平家物語」の中で、西洋の様々な「叙事詩」、すなわち『イリアス』・『オデッセイア』や『ニーベルンゲンの歌』・『ローランの歌』等を取り上げ、日本の軍記物語との本格的な比較の第一歩を踏み出した<sup>1</sup>。その功績は評価されるべきである。この論文ではフィンランドの『カレワラ』まで紹介されている。『カレワラ』の成立 (および改訂) が1830年代から50年頃までであることや当時の出版・通信事情などを考えると、この作品が驚くべき速さで世界中に知られるようになったこと、すなわちきわめて大きなインパクトを持っていたこともわかる<sup>2</sup>。

しかし生田は引用した諸作品、たとえば『ニーベルンゲンの歌』を、はたしてどの程度理解していたのだろうか。中世ドイツ文学研究の日本における書誌をまとめた中島悠爾によれば、英雄叙事詩の翻訳や研究を1930年代までは遡ることができるが、それ以前には確たる文献の存在が証明されていない<sup>3</sup>。仮に生田がドイツ語の現代語訳で読んでいたとしても、同じ知識と経験をもちあわせた人々が当時の日本社会にどれだけ存在したのだろうか。少なくとも、生田の論文を読んだ人々の多くが翻訳を通して『ニーベルンゲンの歌』を知っていたと想定するのは無理である。日本語による『ニーベルンゲンの歌』の初訳は、同じく中島によると前篇が1939年、

- 
- 1 生田弘治「国民的叙事詩としての平家物語」第五『帝国文学』138号1906年28-38頁。なおこの時代に軍記物語がどう定義されたかについては多くの研究があるが、大津雄一「『平家物語』とロマン主義」軍記・語り物研究会『軍記と語り物』43 (2007年)、53-63頁；同「文学としての規定と評価」(大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子(編)『平家物語大事典』東京：東京書籍2010年、799-806頁)等を参照。
  - 2 『カレワラ』はエリヤス・リョンロト (Elias Lönnrot: 1802-84) というひとりの人物が、さまざまな口頭伝承をひとつの作品にまとめたものであり、成立過程が明らかであるという点を見ても、他の国々や文化圏の「叙事詩」と比べてきわめて特異な存在であるいえる。しかしそれゆえにこそ、現在では知りえない諸作品の成立事情を推測する鍵を含んでいるとも考えられよう。
  - 3 中島悠爾「日本における中世文学研究文献 (I)」(日本独文学会『ドイツ文学』63号1979年121-135頁)、134頁。なお武田猛夫(訳)『北欧神話 (上) ニーベルンゲン物語』東京：向陵社1917年が(改訂版として同(訳)『ニーベルンゲン物語』東京：慧文社2007年)刊行されたが、これは(中島がその書誌にとり上げなかった)「最話」というべきものであり、また生田の論文より10年以上遅れて刊行されている。

後篇が1942年であり<sup>4</sup>、『ローランの歌』も最初の翻訳が出版されたのは1941年である<sup>5</sup>。生田自身が引用した西洋の古典的作品をどこまで読んでいたかはわからないので、軽率な批判は差し控えなければならない。しかし現在に至るまで軍記物語の研究史で必ずといってよいほど引用される生田弘治の論説が、当初は『ニーベルンゲンの歌』を読んでいない人々に支持され続けてきたという事実は重い。

生田が活躍していた時代、先進諸国の文物を紹介する意義は大きかっただろうが、生田は作品を列挙するだけで内容に立ち入らないばかりか、いかなる典拠に基づくかも記していない。安易な推測をしてはならないが、二次文献で論を組み立てているという印象はぬぐえない。それと比べて今日ではどうか。当時とは状況が大きく異なる日本で行われている研究では、もはやいわゆる「横のものを縦にする」ものはないといいきれのだろうか。歴史学者の鶴島博和は痛烈に批判している。

「(…) で新しい研究が出ると数年して同じような主題の日本語の論文が出る、という現象が続いている。しかも、動向紹介ではなく、オリジナルな論文としてである。前書きによく見られる『…の研究はないので(…を行う)』ということわりはその通りなのだろうか。引用してある史料を丹念に読んだとは思えないものもあり、しかもオリジナルを使ったのか刊行本を使ったのかが不明なものもあった。これでは言語障壁に守られた、盗作に限りなく近いものが出てくる可能性がある。」<sup>6</sup>

元来、日本でも「欧米」の文学や歴史について現地の研究者と伍して最新かつ最高のレベルで活動している研究者は決して少なくない。そのような人々は今後増えるであろう。またそうなることを願うものである。しかしこれが容易でないことも事実である。前置きが長くなったが、小稿で筆者は、従来支配的だった（と表現して差し支えなかろう）受容型の研究から視点を変えて、日本文化（ないしは東アジア文化）を背景に持つ者ならではの観点を提起し、その研究を進めるためのネットワーク構築を提案する。

## 2. 発信するために

ひとくちに「発信」といっても研究者によりその分野やテーマ・方法は様々であるが、ここでは筆者が取り組む中世文学を例として考えたい。

- 
- 4 『ニーベルンゲンの歌』前篇（ジーフリトの死）雪山俊夫（訳）東京：岩波書店1939年（岩波文庫2136-2139）；『ニーベルンゲンの歌』後篇（クリエムヒルトの復讐）雪山俊夫（訳）東京：岩波書店1942年（岩波文庫2140-2143）。
  - 5 坂丈緒（訳）『ロオランの歌——回教戦争——』東京：アルス1941年（世界戦争文学全集6）。原野昇『フランス中世の文学』広島：広島大学出版会2005年、200頁以下も参照。
  - 6 鶴島博和「中世・イギリス」（『史学雑誌』2002年111巻5号「2001年の歴史学界——回顧と展望——」321-326頁）、325頁。こうした指摘は他にも処々で見られる。

はじめにお断りしておくが、標題の「発信型研究」とは、ドイツなどで課題として提起されていながら解決していない、あるいは説得力ある論が出されていない問題に関し、日本文化(文学・歴史等)の研究成果を直接応用することによって解決を目指す、というのではない。同じ時代(ここでは中世<sup>7)</sup>)ではあっても、ドイツ語圏と日本列島社会の文化が相互に影響しあったとは考えられない<sup>8</sup>。しかし、まったく異なった社会であるにもかかわらず類似の事象が起きていることはすでに古くから指摘されている。どちらも強固な身分制社会だったのは世界的な現象としても、12世紀から13世紀にかけて双方で、名利・名声への欲求や財産を捨て、貧困と孤独に生きて托鉢・遊行することを奨励する宗派が生まれた。また当時の両社会における主従関係は必ずしも一対一ではなく、ひとりの人間が複数の主君ないし主人を持つことがありえた。さらに中世社会に広まっていた観念、すなわち理屈で説明のつかないことは神(仏)の意思による、したがって戦士も敬虔であればあるほど神(仏)の加護を得られる、といった考え方が存在したこと、さらにその裏返しとして日本では人知で説明のつかないことを「不思議」といい、ドイツ語圏ではほぼ同じ意味で *wunder* が用いられたこと(両語とも文献資料に頻出する)なども注目される。なぜこのような展開をみたのであろうか。むろん大きな違いもあるが、類型論的方法で考察することが必ずしも不適切とは思われない。相違点を明らかにすることも含めて筆者が目指すのは、異文化圏の研究者にインパクトを与える知見をもたらすことである。具体的には、ドイツあるいは西洋文化圏では通説とされている見解に疑問を投げかけて再考を促す、ないしそもそも問題設定がなされていない分野を開拓する研究を目指す。日本文学・歴史学の研究成果を一瞥すれば、対比対照の可能性があると次々と気づかされるからである。一例を挙げよう。

ドイツ語圏ではディートリヒ・フォン・ベルン(Dietrich von Bern)にまつわる口頭伝承が農民(すなわち宮廷文芸とは無縁と考えられる人々)の間にも広まっていたかという問題に関して、かつては古文書の記述などをもとに、農民も伝承に関与していたという説があった<sup>9</sup>。(逆に、英雄文芸も宮廷文芸である以上、農民が関与しているとは認めようとしぬ研究者もいた。)

7 「中世」の時代区分は日欧で異なる上、それぞれの文化圏内でも議論がある。ここでは当面、1200年～1300年頃を中心とし、必要に応じて前後の期間を加えることにする。

8 ただしここで立ち入ることはできないが、モチーフのレベルだけでも比較対比しうる例は決して少なくないにちがいない。一例を挙げれば、オウィディウス『変身物語』に現れるいくつかの素材が日本文学にも見られることは早くから指摘されている。「ロバの耳、と言われたミダス王」や「自ら彫った象牙の乙女像に想いを募らせるピュグマリオン」がそれである。前者は『大鏡』や『徒然草』の他朝鮮の『三国遺事』で、後者は『日本霊異記』と『古本説話集』で類話が確認される。さらに異類婚とそれによる英雄の誕生・英雄や聖人の冥界訪問・聖者や英雄の死亡時に起きる天変地異や悦楽境など、日独以外にも世界中で確認されている共通事象があるが、本企画の研究対象にはできない。

9 たとえば“Et iste fuit Thideric de Berne, de quo cantabant rustici olim.”「かつて無学の者たちが歌っていたのはディートリヒ・フォン・ベルンであった。」Die Annales Quedlinburgenses. Hrsg. von Martina Giese. Hannover: Hahnsche Buchhandlung 2004 (MGH Scriptores rerum Germanicarum 72), S.370 の記述に基づく。(ただしこの編年誌の編者ギーゼは、rustici を農民とはみなしていない。)

しかしそこに記されたラテン語の *rustici* は「農民」ではなく識字力を持たない人々のことであるという見解が出され、今日に至っている。ではそのような、文字文化と縁のない人々とは一体誰なのだろうか。13世紀当時なら、それは社会の大部分を意味する。王侯君主から「農民」にいたるまで、ほとんど識字力を身につける機会も必要もなかったからである。この論法では「修道院や司教座に付属する学校・施設で文字を学んだ以外の人々」ということになり、論を進めることができない。英雄物語などの口頭伝承に関与していた人物としては、バンベルクの司教グンター (Guntherus: ?-1065) から遍歴の詩人マルナー (der Marner: 13世紀半ばに活躍か) 等多くが知られている<sup>10</sup>。だがそれらの「歌」ないし「語り」は宮廷を中心とする社会でどこまで広まっていたのだろうか。有名な詩人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ (Walther von der Vogelweide: 12世紀末から1230年頃まで活躍) が「宮廷でも路傍でも」歌った可能性を示す例はいまだ十分には顧みられていないように見える<sup>11</sup>。

これに対して同じ時代の日本社会では、『平家物語』など軍記物語の諸作品の写本が貸し借りされ、かつまた書き継がれる一方、数多くの文書や図像史料から琵琶法師が貴族や武士の館で歌ったのみならず、路傍で「語り」ないし「歌い」をしていたことが明らかである。琵琶法師の演目はいくさ語りに限らないので、路傍で「平家」を語っていたと断ずることができるかどうかは筆者の知識が及ばない。だが『一言芳談』(14世紀前半成立)では僧侶が「合戦物語」にうつつを抜かしていると記され<sup>12</sup>、無住(1226-1312)の『沙石集』(1283年)では軍記物語に現れる少なからぬ武士(および関係者)が登場する<sup>13</sup>。前者の物語がはたして軍記物語と軌を一にするか、また後者の説話のひとつひとつが本当に(身分の低い)聴衆に語ったことの再現なのかを検証するのは困難だろう。しかし治承・寿永の内乱が日本列島の広範囲に影響を及ぼした

10 中世末期から宗教改革の時代になると、聖職者による「聴衆の関心をひきつけるためディートリヒら英雄の名を挙げ(ざるをえなかつた)等」の記述がしばしばあらわれる。この点については拙稿「軍記物語と英雄叙事詩(4)——享受史の一側面——」(→註17)を参照されたい。

11 'ze hove und an der strāzen'. In: Walther von der Vgelweide. Werke. Bd. 1: Spruchlyrik. Hrsg., übersetzt und kommentiert von Günther Schweikle. Stuttgart: Reclam 1994 (RUM 819), S. 286. Vgl. Peter Göhler: *ze hove und an der strazen*. In: Thomas Bein (Hrsg.): Walther von der Vogelweide. Beiträge zu Produktion, Edition und Rezeption. Frankfurt a. M.: Lang 2002 (Walther-Studien 1), S.111-116. なお村尾喜夫はこれを「宮廷においても民衆の前でも」と訳している(同(訳注)『ワルターの詩』東京:三修社1969年、93頁)。かつてヴェルナー・フェヒターは、農民は宮廷文芸の受容層からは排される、と断じた(Werner Fechter: Das Publikum der mittelhochdeutschen Dichtung. Frankfurt a. M.: Diesterweg 1935 (Deutsche Forschungen 28), 2. Nachdruck Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1972, S. 2)。しかし上記 *rustici* の解釈に見られるように、文献で証明できない事象に対する現在の研究者の姿勢は慎重で、*rustici*=illitterati(非識字者)であるという枠を超えるテーゼは、筆者の目が及んだ限りでは出されていない。

12 小西甚一(校注)『一言芳談』東京:筑摩書房1998年(ちくま学芸文庫10-6)、111頁。

13 小島孝之(校注・訳)『沙石集』東京:講談社2001年(新編日本古典文学全集52)。以下古文の引用は一部新字体による。なお『沙石集』については大隅和雄『信心の世界、遁世者の心』東京:中央公論新社2002年(日本の中世2)も参照。

ことを考えると、路傍の琵琶法師も「平家」の素材を語っていたと想定することは許されよう。筆者は、(自身の憶測を交えず)あくまで現在の定説に依拠しながら日本の中世社会の文芸活動を異文化圏の研究者に伝えることで、彼ら彼女らに大きな刺激を与えられるのは間違いないと考える。無住について付け加えると、「八宗兼学」の彼は『沙石集』ののちに著した『雑談集』(1305年)で、「虚似ナレドモ、コレニヨテ、衆生利益アレバ、慈悲ノ方便作ズト云フ事ナシ。(…)愚老ハ随分ノ恵性有テ、利益有バ、教訓等ニ妄語スル事有リ。方便也。若シ利益有ル妄語ナラバ、反テ實語也。」と述べ、人々に仏教の教えを広めるためには、必要であれば事実の伝達よりも妄語を優先し、方便としてこれを伝えるのだと明言している<sup>14</sup>。その一方で彼は同じ作品の末尾で「後哲愚意ヲ察シ、棄テ置ク可カラズ。助成シ添削シテ、通世間流アラバ、黄壤ノ下ニテモ一笑、遠ク法友ト為ラン。」と後代の人に補正してほしい、と述べてもいる<sup>15</sup>。これを無住の謙虚さの現われと見るのが素直な解釈であろうが<sup>16</sup>、もしかするとこうした慣用表現を用いながら自信を表現した可能性も捨てきれない。謙虚さにせよ自信にせよ、創作者のこのような姿勢はヨーロッパの文芸でもしばしば見られる。いささか乱暴かもしれないが、「神の啓示によって書を著す」「幻視 (Vision) により事実を述べる」という創作の動機づけから、写字生がその原典をけっして一字一句忠実に再現したのではないという事実まで、比較・対比によって新たな視点を提示できる可能性があるのではないだろうか。歴史学者ならただちに、両社会で偽文書が作成されたこと、そしてそれらがしばしば「夢告」などを契機とし、必ずしも今日的な作為によるのではなかった点を指摘するにちがいない。

筆者が今後の研究企画で目指すのは、主として上記のように類似の現象に関する研究成果をもとに、ヨーロッパ側に新たな情報を発信することである。

### 3. 目標

筆者は従来「英雄叙事詩」と「軍記物語」という、ともに口承文化と文字文化の接点で成立したジャンルを対照させて考察をおこなってきた<sup>17</sup>。今後もこの方針を継続するが、その一方

14 山田昭全・三木紀人(校注)『雑談集』東京：三弥井書店1973年、85-86頁。

15 同上、324頁。

16 無住は同じ文脈で、「先年沙石集、病中ニヲカシゲニ書き散シテ、再治及バズシテ、世間ニ披露、讀敗相半バ歟。」(同頁)と弱気と受け取れる言辭を述べている。しかしそれにもかかわらず分厚い書を書き上げたのは執念ともいうべき気力のなせるわざであろう。

17 近年の日本語論文のみ挙げさせていただく。拙論『『ケルン教会家人法』と『アルプハルトの死』に見る主従関係の回復と仲介者の役割——中世における紛争解決の一側面(1)——』(北大)『独語独文学研究年報』28号2001年、1-14頁；同『「ディートリヒの歴史叙事詩」における>beasts of battle<のモチーフについて』(北大)『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』46号2004年、137-155頁；同「軍記物語と英雄叙事詩——成立・書承期の社会背景——」(北大)『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』48号2005年、133-154頁；同「軍記物語と英雄叙事詩(2)——J.ブムケによる「不確定テキスト」(‘der unfeste

で、ジャンルをしぼって対比するという営みには限界があることも次第に明らかになってきた。どちらも、中世のドイツ語圏と日本社会それぞれに出現した文芸の中で他ジャンルから隔離した存在ではなく、同時代の様々な文芸形態から影響を受けているからである。そこで今後は、「英雄文芸」（「英雄叙事詩」と「軍記物語」を包括する概念としての仮称）を取り巻く世界ないし環境に目を向ける。具体的には以下の3点を目標とする。

- ①従来に続き英雄叙事詩諸作品について文献学的基礎研究を遂行し発展させる。
- ②「日本のゲルマニスト」として中世ドイツ文学研究の成果を再検討し、ドイツ語圏を中心とする海外の研究者に新たな視点を提起する。
- ③中世文学に関する日欧共同研究の活性化を準備する。

まず①について。ここにいう文献学的基礎研究とは、特定の語彙（語野）およびモチーフが各作品（およびその諸本）においてどのような傾向で用いられているかを示すことである。この研究はすでにいくつかの論考を発表しており<sup>18</sup>、今後も継続する。これにより、ドイツで進行中の英雄叙事詩の編纂プロジェクトにささやかながら貢献できれば幸いである。また可能であれば、特定の集合写本（Sammelhandschrift）に収められた作品群における語彙の用法が、部分的に写本の制作依頼者（ないし筆者を任された写生字）の嗜好を反映した可能性があることを明らかにしたい。

なおお付言すると、たとえば「騎士」を表わす *ritter*（現代のドイツ語では *Ritter*）に関してはヨアヒム・ブムケの包括的な研究がある<sup>19</sup>。しかし英雄叙事詩からは『ニーバルンゲンの歌』と『クードルーン』のみが対象とされ、「ディートリヒ叙事詩」の作品群はとり上げられていない。そこで筆者はこのジャンルの作品群について *ritter* および関連する語彙の分布を調査し、傾向

- Text')の概念を中心に——」（北大）『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』49号2005年、89-107頁；同「軍記物語と英雄叙事詩(3) —— ヨーロッパにおける二重の主従関係 ——」（北大）『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』50号2006年、1-16頁；同「東西におけるモンゴル「襲来」伊藤章（編）『グローバリゼーションと多文化共生』（北海道大学国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書66）2007年、31-50頁；同「軍記物語と英雄叙事詩(4) —— 享受史の一側面 ——」（北大）『メディア・コミュニケーション研究』54号2008年、1-17頁；同「軍記物語と英雄叙事詩(5) —— 概念規定に関する諸問題 ——」（北大）『メディア・コミュニケーション研究』57号2009年、35-54頁。
- 18 筆者は1994年度から英雄叙事詩の語彙研究を進めている。拙論「Kriegerbezeichnungen in der Dietrichepik —— *helt*, *degen*, *recke* und *wigant* sowie *ritter* ——」（北大）『独語独文学研究年報』32号2005年、57-79頁；同「Literarische Darstellungen eskalierender Schlachten im Mittelalter. Ein Ansatz zum Ost-West-Vergleich」Von Mythen und Mären. Festschrift für Otfried Ehrismann. Hrsg. von Gudrun Marci-Boehncke/Jörg Riecke. Hildesheim: Olms (2006), S.626-643；同「Der Wortschatz bei >Virginal<-Versionen (V10), (V11) und (V12) -Teil 1: Kriegerbezeichnungen」（北大）『独語独文学研究年報』36号2009年、62-79頁；同「Der Wortschatz bei >Virginal<-Versionen (V10), (V11) und (V12) -Teil 2: Heiden und außer- sowie übernatürliche Wesen」（北大）『メディア・コミュニケーション研究』58号2010年、137-152頁；同「Der Wortschatz bei >Virginal<-Versionen (V10), (V11) und (V12) -Teil 3: Topoi」（北大）『メディア・コミュニケーション研究』59号2010年、77-94頁。
- 19 Joachim Bumke: Studien zum Ritterbegriff im 12. und 13. Jahrhundert. 2. Aufl. Heidelberg: Winter 1977 (Beihefte zum Euphorion 1).

と特性を明らかにする研究を行っている。ドイツ語圏の研究者が今までこうした研究をほとんど行ってこなかった理由としては、従来の校訂版が古すぎて研究対象として問題があったことが第一に挙げられる。(しかしそれはブムケが行った100万行以上の調査対象の多くについてもあてはまる。)さらに、近年は解釈および分析の理論的研究が主流を占め、文献学的研究が相対的に後退している事情もある。今後次世代において新しい校訂版が電子書籍として普及するようになると、筆者が行う研究は迅速かつ正確に検証・訂正されてゆくだろうが、それでよい。肝要なことは、既存の領域という枠を越える視点で(すなわち独自のテーマをもって)研究に貢献することである。

②については可能性を指摘するにとどめるが、きわめて多様な「切り口」があると思われる。たとえば『アルプハルトの死』第417節には以下の記述がある。

すると勇者エックハルトはいった。「激戦でわれらの陣から脱落しない者がどれだけいるかを確かめるのが得策と思います。」彼らは兵一万一千を有していた。これは高貴な人々だった。<sup>20</sup>

何気ない表現だが、平家物語をはじめとする軍記物語諸作品でしばしば現れる「駮武者」を思い出させるとはいえないだろうか。軍団が進むにつれて規模が膨らむ。それはあとから馳せ参じた者もあろうが、現地でそのつど徴用された者もいたかもしれない。勝ちいくさであれば脱落する者は少なからうが、状況が不利となれば、敵前で逃亡する者が出るのは世界中に共通の現象であろう。逃亡だけではない。寝返りの可能性もあったろう。(むろん、当時の「レーエン制」にあっては出陣する日数が定められていたというから、それも念頭に置かなければならない。)また中世の日本社会では遠征する軍団に城攻めのための<sup>そまく</sup>榎工が同行していたことや、『太平記』にも現れる江口・神崎の遊女といった人々の存在は、対象を英雄叙事詩から他のジャンルに拡大するとさらに可能性が広がるが、ここでは割愛する。いずれにしても、日本側、とりわけ川合康らの一連の研究成果を援用できる可能性がある<sup>21</sup>。また英雄叙事詩で見逃せないのは、戦闘場面が頻出するため虚構とはいえ人々の心理・駆け引き・打算などに加えて、和議の交渉の進め方などが読み取れる点である。これらをどこまで史実(当時の習慣)の反映と見るかは措くとしても、日欧の比較は十分可能であろう<sup>22</sup>。

さらに日本では、『平家物語』の異本のひとつとして『源平闘諍録』(14世紀前半成立)があ

20 Alpharts Tod — Dietrich und Wenezlan. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Viola Meyer. Tübingen: Niemeyer 2007 (Texte und Studien zur mittelhochdeutschen Heldenepik 3), S.70.

21 川合康「内乱の展開と「平家物語史観」」同(編)『平家物語を読む』東京:吉川弘文館2009年、137-156頁、同『源平合戦の虚像を剥ぐ』東京:講談社2010年(講談社学術文庫1988)[初刊1996年]等を参照。

22 研究動向に関しては山内進「同意は法律に、和解は判決に勝る——中世ヨーロッパにおける紛争と訴訟——」『歴史学研究』717(1998年11月)、24-34頁および服部良久「中世ヨーロッパにおける紛争と紛争解決——儀礼・コミュニケーション・国制——」『史学雑誌』113編3号2004年、60-82頁等を参照。

る<sup>23</sup>。ここでは、千葉氏を中心とする東国武士の関心に起因(ないし対応)すると見られる記述が数多く見られることが特徴である。その背景には、祖先の活躍や武勲に強い関心を持つ人々があり、これに対応する編纂作業を行わせることができるだけの権力と財力があつたと考えてよかろう。竹崎季長(1246-?)の『蒙古襲来絵詞』(または『竹崎季長絵詞』)も、「無足の御家人」から戦功によって地頭職を得るまでに至った自身の活躍を描かせたものとして、『源平闘諍録』や今川了俊(1326-1420?)の『難太平記』(1402年)と同様の方向性を持つと思われる。しかし中世のドイツ語圏ではこのような例は稀である。富も権力もある人物の名が(依頼者として)作品に出ることはしばしばあるが<sup>24</sup>、自分自身ないしその祖先の活躍を文芸作品として制作させる土壌は筆者の知る限りなきに等しかった。しかし、中部ドイツで一時は大きな政治的影響力を有したいくつかの家門には他と異なる特徴が見られる。それらについては稿をあらためて論ずることとするが、有名な作品を借り出して筆写させ、それを所有することが権力と富の象徴であつたヨーロッパの中にあつて、写本群を有するだけでなく自らの活躍も記述させた家門の研究には、日本側の成果の応用が期待される。

なおドイツ語圏に限ってみると、比較的詳細に生涯をたどることのできる詩人はわずかだが存在する。たとえば今日のオーストリアで活躍していたウルリヒ・フォン・リヒテンシュタイン(Ulrich von Liechtenstein: 1200頃-1275)は、騎士身分を持つと同時に詩作をしたことで知られ、その代表作である長編の『貴婦人への奉仕』は(おそらく大部分虚構とはいへ)中世ドイツ文芸で最初の「自伝」形式による作品である<sup>25</sup>。日本では同時代や後世の史料によって詩人の系譜や詩作の動機が辿れる場合が少なくない。だがドイツ語圏の研究者はこの面で援用すべき史料をほとんどもたない。もちろん、日本文学・史学の成果をただちに応用できるとはいえないが、文学のグローバル・ヒストリーにおける位置づけや特徴を相対化して示すことは可能であろう。

さらに、このウルリヒが作品を残した Tagelied についても私たちは興味深い知見を発信することができよう。多くの文化圏で発生が認められる「アルバ」は、ドイツ語圏にはフランスからもたらされて広まったとされているが、日本では実社会に根ざした習慣として研究が進ん

23 福田豊彦・服部幸造(全注釈)『源平闘諍録』上・下 東京:講談社1999・2000年(講談社学術文庫1397・1398)。

24 Joachim Bumke: Mäzene im Mittelalter. Die Gönner und Auftraggeber der höfischen Literatur in Deutschland 1150-1300. München: Beck 1979 等、ドイツでは研究が盛んである。高価な羊皮紙に文芸作品を書くことは、有力者の依頼(および資力提供)なしには不可能だったからである。

25 Ulrich von Liechtenstein: Frauendienst. Hrsg. von Franz Viktor Spechtler. 2., durchgesehene und verbesserte Aufl. Göppingen: Kümmerle 2003 (GAG 485). ウルリヒに関しては、現在までに94通の文書が残されており、中には彼自身が発給したものもある。Sandra Linden: Eine Spurensuche zu Ulrich von Liechtenstein. In: Sandra Linden/Christopher Young (Hrsg.): Ulrich von Liechtenstein. Leben - Zeit - Werk - Forschung. Berlin/New York: de Gruyter 2010. S. 45-98, hier S. 45. この作品には中世ドイツ文芸としては例外的に多くの実在した人物が登場するが、そこに描かれた事象や行為を史実とみなすことは困難である。

でいるのに対し、ヨーロッパでは文芸ジャンルとしての研究はともかく、社会でどのような意味を持っていたかは未だ明らかにされていない。中世のヨーロッパでも日本の「歌合せ」のような娯楽の機会があったことは想像できるが、それを実証する史料はどれだけ存在するのだろうか。(ちなみに『ヴァルトブルクの歌合戦』は虚構である<sup>26</sup>。) イギリスの研究者アーサー・トマス・ハットーは世界の多くの文化圏にみられる「後朝」をまとめた大著を編纂したが、日本に関する記述はあまりに乏しい<sup>27</sup>。しかもこの間に研究は進捗している。都の宮廷貴族が繁栄を誇っていた時代は、『源氏物語』や『枕草子』から日記文学まで女流文学が隆盛を極めた。しかし貴族層の弱体化により、女流文学・後宮文学も衰退する<sup>28</sup>。こうした現象をヨーロッパの歴史と重ね合わせることは今のところできない。この点に関するヨーロッパ社会の通説的認識には再考の余地があると思われるが、いずれにせよ、似ている面だけを示すのではなく、異なる面をも示してこそ充実した対比ができる。また、類似の現象の背後にまったく異質な文化が存在することを知る意義の方も小さくなくなる<sup>29</sup>。

最後に③「中世文学に関する日欧共同研究の活性化」について2点述べたい。

まず、中世文学の研究は単独で行うよりも共同研究の方がはるかに効果的である。このようなことは理系では当然で、他の文系諸科学でもすでにあたりまえのことであろう。しかし中世文学研究では必ずしもそうとはいえない。(優れた成果を上げている研究組織が存在することはもちろん筆者も承知しているが。)ある特定のテーマを個人で追求するか、それとも関心を共有するグループで行うかという次元はもとより、たとえ専攻が異なっても(「文学と歴史」、「ドイツとフランス」等)分野を横断する研究者が集まって討議を繰り返すことから得られる知見や刺激ははかりしれない。

ふたつ目として、ドイツなど研究対象国は当然として、可能であれば他の文化圏の研究者とも研究交流を進め、得られた知見を共有するネットワークを構築することを提言したい。繰り返すが、一人の研究者(やひとつのグループ)が中世文学を研究しても、(内輪で)得られる語学力や知見には限りがある。幸い西洋中世学会(2009年設立)では、学会全体のみならず、各

26 Burghart Wachinger: *Der Sängereid auf der Wartburg. Von der Manessischen Handschrift bis zu Moritz von Schwind*. Berlin/New York: de Gruyter 2004 (Wolfgang Stammeler Gastprofessur für Germanische Philologie 12), S.13.

27 Arthur Thomas Hatto (ed.): *EOS. An Enquiry into the Theme of Lover's Meetings and Partings at Dawn in Poetry*. The Hague: Mouton 1965. 中国と日本については碩学アーサー・ウェイリー (Arthur Waley) が執筆している (107-113、114-125頁)。なお Shoko Kishitani (岸谷敏子): *Das Tageliedmotiv im Altjapanischen*. In: PBB (Halle) 84 (1962), S.302-311 が日本からドイツ語で発信する研究の先駆けをなしている。ドイツ語圏の作品についてはいくつかの翻訳・研究があるが、ここでは割愛させていただく。

28 網野善彦「遊女と非人・河原者」(桜井英治(編)『網野善彦著作集』第11巻 東京:岩波書店2008年、403-432頁 [初刊1989年])、414頁; 今井卓爾「女流日記文学の本質」(同(監修)『女流日記文学とは何か』東京:勉誠社1991年、9-26頁)、25頁参照。

29 たとえばピーター・ドロンケ『中世ヨーロッパの歌』(高田康成訳) 東京:水声社2004年日本語版序文(9-17頁) 参照。

国文学を研究する若手研究者たちのイニシアチブによる活動が始まっている。このようなネットワークを発展させかつ活用することにより、個人レベルでもグループでも研究は大きく進むことだろう。そして、その成果を（日本国内だけでなく）海外へ発信することが鍵となる<sup>30</sup>。

#### 4. 課題

筆者の研究において大きな意味を持つのは文芸作品と実社会との関係である。とくに日本の文芸作品では、歴史事件がその成立の契機となった場合、作品中で事件の内容がかなり忠実に再現されている。歴史学者上横手雅敬が『平家物語の虚構と真実』という題で著書を著すほどである<sup>31</sup>。けれども、たとえばドイツの歴史学者が『ニーベルンゲンの歌』について同様のタイトルの書を著すことは到底考えられない。実在した人物の名前がいくつか出るとはいえ、物語自体はまったくの虚構だからである。ナチス時代にプロパガンダの手段として利用されたという事実を措くとしても<sup>32</sup>、ほとんどの登場人物について実在を前提にするのはアナクロニズムだというのが研究者の共通認識である。筆者の経験では、軍記物語をはじめとする日本文学との比較・対比をしようとする時、そして西洋の研究者と論じる時、まさにこの点が最大の障壁となる。以下に長くなるが、よく知られた例を挙げて後の考察の礎としたい。

治承4(1180)年4月29日、都で強風があった。これは史実で様々な文書(『明月記』・『玉葉』・『山槐記』・『百練抄』・『方丈記』・『平家物語』・『源平盛衰記』等)に記録が残っている。そのうち以下の4作品の該当部分を対照させる。

##### ①九条兼実『玉葉』(同日条)

「天晴。午の刻、庁の頭清景来たる。射手の散状を申す、当時返奉十五人、進みて催すべき由仰せ了んぬ。今日申の刻上辺(三四条の辺)廻飄忽に起り、屋を発き木を折り、人家多く以て吹き損ずと云々、又同時雷鳴、七条高倉辺に落つと云々。今日新文庫将来し、吉日に依り文書を置き始む。又白川辺雹降り、又西山方同然と云々。」<sup>33</sup>(原文漢文)

---

30 ハンス・ヴェルナー・ゲッツは「ドイツと日本の研究には共通点がある。それぞれドイツ語、あるいは日本語で書かれている限り、語学の障壁の故に、その成果が他の研究者にはほとんど知られることがないということである」と述べている。(同「21世紀はじめの中世史研究——ドイツと西ヨーロッパの歴史学における発展・現状・展望——」近藤成一/小路田泰直/デトレフ・タランチュエフスキ/ローベルト・ホレス(編)『中世 日本と西欧——多極と分権の時代——』東京：吉川弘文館2009年、367-383頁)、376頁。先の鶴島の批判と合わせて考えるべき課題である。

31 上横手雅敬『平家物語の虚構と真実』上・下 東京：塙書房1985年(塙新書61・62)。このテーマについてはその後も上記川合をはじめ数多くの研究者が成果を発表している。

32 近現代における英雄叙事詩の受容はしばしば政治と結びついており、ドイツ語圏でも比較的研究が盛んな分野である。

33 高橋貞一(訳)『訓読玉葉』第四巻 東京：高科書店1989年、277頁。

## ②藤原定家『明月記』（同日条）

「天晴る。未の時許り雹降る。雷鳴先づ両三声の後、霹靂猛烈。北方に煙立ち揚る。人焼亡を称ふ。是れ颯なり。京中騒動すと云々。木を抜き沙石を揚げ、人家門戸并に車等皆吹き上ぐと云々。古老云ふ、未だ此の如き事を聞かずと。前齋宮四条殿、殊に以て其の最となす。北壺の梅樹、根を露はし仆る。件の樹、簷に懸りて破壊す。権右中弁二条京極の家、又此の如しと云々。」<sup>34</sup>（原文漢文）

## ③『方丈記』

「又、治承四年卯月ノコロ、中御門京極ノホドヨリ、大キナル辻風発リテ、六条ワタリマデ吹ケル事ハベリキ。三四町ヲ吹キマクルアヒダニ、籠レル家ドモ、大キナルモ、小サキモ、ヒトツトシテ破レザルハナシ。サナガラ平ニ倒レタルモアリ。桁・柱バカリ残レルモアリ。門ヲ吹キハナチテ四五町ガホカニ置キ、又、垣ヲ吹キハラヒテ隣トヒトツニナセリ。イハムヤ、家ノウチノ資材、数ヲ尽クシテ空ニアリ。檜肌・葺板ノタグヒ、冬ノ木ノ葉ノ風ニ乱ルガ如シ。チリヲ煙ノ如ク吹キタテタレバ、スベテ目モ見エズ。ヲビタ、シク鳴リドヨムホドニ、モノ言フ声モ聞コエズ。彼ノ地獄ノ業ノ風ナリトモ、カバカリニコソトゾ覚ユル。家の損亡セルノミニアラズ、是ヲ取り繕フアヒダニ、実ヲソコナヒ、片輪ヅケル人、数モ知ラズ。コノ風、未の方ニ移リユキテ、多クノ人ノ歎キナセリ。辻風はツネニ吹ク物ナレド、カハル事ヤアル、タゞ事ニアラズ、サルベキ物ノ論カナドゾ、ウタガヒハベリシ。」<sup>35</sup>

## ④『平家物語』第三卷「颯」

「同（＝治承3年）五月十二日\* 午剋ばかり、京中には辻風おびたゝしう吹いて、人屋おほく顛倒す。風は中御門京極よりおこって、未申の方へ吹て行に、棟門・平門を吹きぬいて、四五町十町吹きもてゆき、けた・なげし・柱ななどは、虚空に散在す。檜肌、ふき板のたぐひ、冬の木葉の風に乱るゝが如し。おびたゝしうなりうどよむ音、彼地獄の業風なり共、これには過ぎじとぞ見えし。たゞ舎屋の破損するのみならず、命を失なふ人も多し。牛馬のたぐひ、数を尽して打殺さる。是たゞ事にあらず、御占あるべしとて、神祇官にして御占あり。「今百日のうちに、禄を重んずる大臣の慎み、別しては天下の大事、並に、仏法・王法共に傾いて、兵革相続すべし」とぞ、神祇官、陰陽寮共にうらなひ申ける。」<sup>36</sup>（\*史実は上述のように治承3年4月29日。）

西洋文化圏の研究者にこの例を示すと、誰もが驚きを隠さない。彼らの中世文学と比較対比するものとして提示された日本の作品がほぼ同時代の歴史事象と密着し、様々なデータまで記されていることに違和感を抱くことは十分想像がつく。日本では、『将門記』以来、このジャン

34 今川文雄（訳）『訓読明月記』第一巻 東京：河出書房新社1977年、15頁。

35 佐竹昭広（校注）『方丈記』（同・久保田淳（校注）『方丈記・徒然草』東京：岩波書店1989年（新日本古典文学大系39）、1-30頁）、6-7頁。

36 梶原正昭・山下宏明（校注）『平家物語』上 東京：岩波書店1991年（新日本古典文学体系44）、168-169頁。

ルの作品がしばしば他の文書に依拠したことが知られ、また推測もされている。上記の『平家物語』の記事も『方丈記』を参照したとする説が有力である<sup>37</sup>。これに対して、数世代から数世紀以上にわたる口頭伝承に基づく「語り」を素材として文字文芸となったのがヨーロッパの英雄叙事詩である。この大前提に立つ（そしてそれ以外はありえない）西洋人の目には、軍記物語はむしろ「年代記」に近いと映るであろう。英雄叙事詩では先に挙げたような「データ」がほとんど語られない<sup>38</sup>。パウラやハットーがこのジャンルをその「英雄文芸」に関する包括的な著作から除いたのもそこに大きな理由があるにちがいない<sup>39</sup>。

『ニーベルンゲンの歌』やディートリヒ叙事詩の場合、その核となる部分に歴史的事件がある（と証明されている）か否かにかかわらず、口頭伝承の起源は中世ではなく古代に遡る。ところが中世に入ると、同じような出来事が叙事詩となることはなかった<sup>40</sup>。同様の「語り」は中世に入っても戦いが起きるたびに生まれてきたにちがいない。それらが識字力を持つ人々によって文字文芸化されることがなかったのはなぜだろうか。ある研究者は筆者に「身近すぎて書けなかったのだろう」と述べた。

逆に日本社会では、たとえ口頭伝承が先行していようといまいと、文字文芸化される時は年月日・場所・人名・年齢・官位等さまざまな要素が盛り込まれるのがいわば必然だったのであり、それ以外の形式では書として成立しえなかったのではないか。日本でも私たちの知りえない「いき語り」は次から次へと発生していただろう。だがこれらも文字文芸化されるには至らなかった。空前の政治的事件を契機に『平家物語』が成立したことは理解できる。『保元物語』・『平治物語』・『承久記』も一連の時間的脈絡でその成立を説明できよう。だがこれだけが当時（13世紀前半）文字文芸となったのはなぜだろうか。あるいは見方を変えて、他にも各地で起きていたであろう合戦の語りや記録から「物語」が生まれなかったのはなぜか。時代が下る

37 たとえば福田豊彦「文学と史学のはざままで」（『本郷』2007年1月 No.67、5-7頁）6頁参照。

38 日下力『『平家物語』の世界的位置——『オシアン』との同質性と異質性を通じて——』佐伯真一（編）『中世の軍記物語と歴史叙述』東京：竹林舎2011年（中世文学と隣接諸学4）、10-31頁等を参照。

39 C[ecil] M[aurice] Bowra: Heroic Poetry. London/Melbourne/Toronto: Macmillan 1952; A[rthur] T[homas] Hatto (ed.): Traditions of Heroic and Epic Poetry. Vol. 1: The Traditions. London: The Modern Humanities Research Association 1980; A. T. Hatto: Eine allgemeine Theorie der Heldenepik. Opladen: Westdeutscher Verlag 1991 (Rheinisch-Westfälische Akademie der Wissenschaften: Geisteswissenschaften; G 307), S.7. なお前2点ではアイヌ民族の『ユーカラ』が英雄文芸のカテゴリーに収められている。

40 ただし従来「歴史歌謡」(historische Lieder)と呼ばれ、近年「政治事件物語」(politische Ereignisdichtungen)の仮訳)と新たに定義づけられた(比較的短い)作品群がある。戦闘など歴史的事件を契機として成立したものの総称だが、定本は今なお Rochus von Liliencron: Die historischen Volkslieder der Deutschen vom 13. bis 16. Jahrhundert. 5 Bde. Leipzig: Vogel 1865-69 であり、研究も遅れている。数少ない成果として Sonja Kerth: *Der landsfride ist zerbrochen*. Das Bild des Krieges in den politischen Ereignisdichtungen des 13. bis 16. Jahrhunderts. Wiesbaden: Reichert 1997 (Imagines medii aevi 1); Karina Kellermann: Abschied vom "historischen Volkslied": Studien zu Funktion, Ästhetik und Publizität der Gattung historisch-politische Ereignisdichtung. Tübingen: Niemeyer 2000 (Hermaea 90)を参照。

と事態は一変し「後期軍記」という巨大なジャンルが出現する。しかしそれら以前の段階ではいかなる答えが得られるか、筆者には予想もつかない。ただ残された作品群を見る限りでは、日本では今日に伝わる形式でしか軍記物語は成立しえなかった。ヨーロッパでも同様だったと考えてよいのではないだろうか。作品やジャンルを定義づけるためには、背景文化の理解が必須であることをあらためて認識したい。

## 5. おわりに

研究はどんどん細分化してゆく。また次から次へと新しい分析理論が現れて一種のブームとなる。近年の中世文学研究では「ジェンダー」・「心性史」・「フィクション」から「紛争」・「メディア」・「儀礼」等をキーワードとする新しい理論が次々と現れている。それらに立ち入ることは筆者の手に余るが、中世文芸の諸作品に由来とは異なる角度から光を当て、新たな知見をもたらしたことは率直に認めたい。しかし少なからぬ理論がまもなく消えてゆく。次世代の研究者はどこに目標を置くべきか。単にドイツで最先端と思われる研究を追いかけても、緊密なネットワークに身をおいていない限り、時流に乗り続けることは困難であろう。それは日本人だからではない。日本にいるからでもない。第一線にいる研究者から常に最新の情報を得られるような関係を維持することができなければ、所詮どこにいても同じである。ドイツで研鑽を積み、博士号の取得等を通して高い能力と強力な交流関係を築けた研究者の「強み」はまさにそこにあるといってよい。ではこうした条件を持たない多くの研究者はどうすべきか。歴史学者羽田正は「研究者の多くは、そのグリッドの中でさらに細分化された研究対象について、それまでの長い研究史をふまえて細かい実証論文を書くことになる。このような作業が若い意欲あふれる学生にどれだけ魅力的に映るだろうか」と述べる<sup>41</sup>。

繰り返しになるが、次々と現れる研究理論をフォローし続けるのは容易ではない。まして常に最新の研究成果と対決し、独自の見解で現地の研究者と渡り合うことはさらに困難である。作品は膨大な数にのぼる。これらをまず読んで解釈し、分厚い先行研究にも目を通さなければならない。まして若い世代の人々であれば、導き手がいなければ作業は苦難の連続で、よほど強い関心と気力体力がなければ投げ出したくなるのも無理はない。筆者が提言するのは、研究者それぞれが自らの寄って立つ文化を機軸としてドイツ文学をとらえなおすという方法である。端的にいえば、自分の土俵の上に立ち、その利を生かす視点を獲得することを目指す。(居住する「国」で「マイノリティ」である場合はさらに視野が広がる可能性もあろう。)

筆者の印象ではあるが、ドイツ語圏の様々な研究者から、「日本」のゲルマニストは概してドイツの伝統である実証主義にもとづく研究を行っていると評価されている。ある専門家は、「(…

41 羽田正「歴史理論」(史学会『史学雑誌』117-5、2007年、5-9頁)、8頁。

国で『ニーベルンゲンの歌』と社会民主党』というテーマの博士論文が受理されているのを知った時は驚いた」と語っていた。そのような研究をしようとは思わない。まして若い人たちに薦めるつもりもない。ドイツ語圏で誕生し、また受け継がれ発展してきた厳密な実証的研究の方法を習得することが重要であるのはあらためていうまでもない。またこの厳密な手法を若いうちに徹底的に学び、かつ保ち続けるべきだと考えている。けれども、彼の地における最新の研究状況を知ることの重要性を認めつつ、これらを常に追いかけるのではなく、独自の視点を持つことはもっと重視されてよい。

\* \* \*

これまで述べてきた方法には批判があろう。オーソドクスなドイツ文学研究から「はずれた」とみなされるリスクが予想される。筆者自身、ある偶然がなければこうしたテーマを続けることはなかった。同じ経験を持たない次世代以降の人々に小稿で縷々書き連ねた方向を強いる意図はない。「比較はとかくシンポジウム型学問に陥りやすい」という批判も東西を問わず聞かれる<sup>42</sup>。しかしシルヴィア・ラナワケのように、ドイツ文学の研究者でありながら *dawnsong* のひとつのタイプとしてドイツ文学の研究事典であえて日本の後朝の歌をとり上げ、*Tagelied* がこれとともにひとつのジャンルに凝縮しようとして、比較研究を促そうとする人もいる<sup>43</sup>。こうした萌芽を伸ばすのは、私たちゲルマニストが日本文学・史学等の研究者と協力して行うべき仕事であり、また成果も期待されうる。

筆者が直接面談し、「日本のゲルマニストとしていかなる貢献ができるか」と尋ねた研究者の多くは、即座に「作品の翻訳」を挙げた。その重要性は論を俟たない。では研究面ではどうかときくと、ある人からは「それをするにはコンタクトが弱すぎる」(*Dafür ist der Kontakt zu schmal.*)と返された。ドイツ語圏ではしばしば、教授を中心とする研究室単位で共同研究が企画されている。当時「貢献」を個人レベルでしか考えていなかった筆者に対し、先方はグループによる研究を前提にしていた。どちらが効果的かはいうまでもない。しかし(言い訳になるが)日本では大半のゲルマニストが語学教師であるため、研究の「エフォート」はせいぜい20~30パーセントに過ぎず(実際にはさらに低いかもしれない)、国内で志を同じくする研究者との連携もままならないのではないだろうか。

実証的な研究を進めれば進めるほど、研究史の整理と理解に多くの時間が必要になる一方で、証明できる事柄は小さくなる。まして領域を超えて異なる学問分野の論理をとり入れようとすると、整合性を維持するためさらに大きな労力が必要になる。常にアンテナを張っていないと、

---

42 Hans-Werner Goetz: *Moderne Mediävistik. Stand und Perspektiven der Mittelalterforschung*. Darmstadt: Primus 1999, S. 13; 吉田伸之「2001年の歴史学界 総説」(史学会『史学雑誌』111-5、2001年、1-5頁)、3頁。

43 Silvia Ranawake: *Tagelied*. In: *Reallexikon der deutschen Literaturwissenschaft*. (Neubearbeitung) Bd. 3. Hrsg. von Jan-Dirk Müller. Berlin/New York: de Gruyter 2003. S.577-580, hier S.578.

通説と思っていたものが実はすでに新説にとって代わられつつあることを知らずにいる危険性があり、他分野ならなおのことである<sup>44</sup>。こういって、「日本文化を出発点として中世ドイツ文学を考察する」という提言に矛盾すると解されるかもしれない。だが様々な分野の研究者と日頃から接触があれば、そのリスクを最小限にとどめることができる。そもそも独創的な研究——およそ研究にオリジナリティが要求されるのは当然であろう——を目指すのであれば、新たな課題に挑むのと同時にリスクを回避する努力も怠ってはならない。そこでまず「身近」な文学・歴史学を中心とする研究者に御教示をいただき、なおかつ意見交換ができる機会を設け、あるいは利用させていただきたく思う。

こうして内外の研究者との協力関係を強め、組織的共同研究のためのネットワークの構築と拡大を目指す。大方のご意見ご批判を賜れば幸いである。

#### (付記)

小稿は文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C・課題番号23520358）の助成を受けて行う研究の成果の一部である。

(2011年8月11日受理)

---

44 たとえば、小稿第2章で挙げたヨーロッパの主従関係については従来ミッタイス（H. Mitteis: 1889-1952）、ガンズホーフ（F. L. Ganshof: 1895-1980）らの論が通説とみなされていた。しかしすでに Roman Deutinger: Seit wann gibt es die Mehrfachvasallität? In: ZRG (Germ. Abt.) 115 (2002), S. 78-105 の他、ゲルハルト・シュミッツ（Gerhard Schmitz）「ドイツ法制史・国政史の諸論点」（上記近藤他（編）→註30）、51-77頁）、68-69頁、最近では Jürgen Dendorfer/Roman Deutinger (Hrsg.): Das Lehnswesen im Hochmittelalter. Forschungskonstrukte - Quellenbefunde - Deutungsrelevanz. Ostfildern: Thorbecke 2010 (Mittelalter-Forschungen 34)等が新たな視点による議論を展開している。これに関連して、イギリスの研究者スーザン・レイノルズ（Susan Reynolds）の研究とこれをめぐる議論の包括的な紹介をお願いいたしたく思う。

## 《Zusammenfassung》

Ankündigung eines Forschungsprojekts

# Deutsche Literatur des Mittelalters in der Perspektive eines japanischen Germanisten

TERADA Tatsuo

Die Japan Society for the Promotion of Science hat den Antrag auf ein Stipendium zur Erforschung der deutschen Literatur des Mittelalters aus dem Gesichtspunkt eines Germanisten, der die japanische Kultur und Tradition verinnerlicht hat, angenommen. (Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology: Grant-in-Aid for Scientific Research (C), Project-No.23520358) Die Schwerpunkte des Projekts liegen auf den folgenden Aufgaben:

1. (Fortsetzung der) Wortschatzuntersuchung der Dietrichepen. Zu erhoffen ist dabei, zu einem oder mehreren editorischen Projekten der Dietrichepik im deutschsprachigen Raum mit der Darbietung einiger philologisch herausgearbeiteter Daten beizutragen.
2. Es sollte (oder könnte) sich lohnen bzw. zumindest anregen, sich mit der Perspektive eines Auslandsgermanisten an den aktuellen Diskussionen zu beteiligen und/oder mit den allgemeinen Ansichten auseinanderzusetzen. Als der 'kritische Apparat' sollen die mit der japanischen Kultur des Mittelalters gemeinsamen bzw. ihnen ähnlichen Phänomene auf verschiedenen Ebenen dienen: Fiktionalität und Realität, Entstehungs- und Überlieferungsprozess einer Dichtung, Positionen des Dawnsongs in den beiden Gesellschaften u. a. Dabei sind natürlich auch die Unterschiedlichkeiten ebenso sorgfältig zu beleuchten, damit jeder einzelne Gegenstand im Hinblick auf das ganze Spektrum der japanischen Literatur des Mittelalters betrachtet werden kann.
3. Von großer Bedeutung ist die Zusammenarbeit mit den Fachkolleginnen und -kollegen von den betroffenen Forschungsrichtungen aus Ost und West, ohne die das Projekt nicht gelingen kann. Im vorgegebenen Zeitraum von vier Jahren (2011–14) wird also versucht und angestrebt, die bereits bestehenden Kontakte zu verstärken und möglichst viele neue zu gewinnen, um damit — auch künftig — zur interkulturellen Germanistik beizutragen.